

水辺空間の特性と履歴に関する考察 ー古鼠水辺公園をケーススタディとしてー

並木 義和¹・佐々木 葉²

¹ 学生会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail: yoshikazu_namiki@toki.waseda.jp)

² 正会員 博士(工学) 早稲田大学 創造理工学部 社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail: yoh@waseda.jp)

近年の景観意識の高まりとともに、河川と周辺地域との関係を念頭に置いた水辺空間整備が求められている現在、本稿で対象とする愛知県豊田市の古鼠水辺公園は、空間のアメニティが向上したということに留まらない、周辺地域への波及が見られる重要な事例であると考えられる。本稿では、水辺空間の過去の使われ方の相違によって整備後の効果が異なるとの視点に立ち、地形図分析と文献調査を通じたケーススタディから、今後の水辺空間整備における示唆を得ることを目的とした考察を行った。

キーワード：古鼠水辺公園，空間特性，履歴，ポテンシャル

1. はじめに

ここ数十年の景観意識の高まりとともに都市空間の質的側面が見直されてきているなか、一般的には、水辺空間には治水・利水や環境は勿論のこと、水辺と人々、さらには周辺地域との関係を念頭に置いたデザインが求められている^{注1)}。こうした流れは、河川管理者による河川改修による治水・利水や、オープンスペースとしての利用や文化活動といった人々の営みが反映されるなど、人々の水辺との関わりを多様なものとしてきている。現在、良好な水辺空間の形成に寄与している要因を探る研究は、河川境界領域の空間特性に着目したものや空間の履歴を扱ったものなど様々行われているが、複雑に絡み合う要因を規定している場所のポテンシャルを読み解くため、今後多面的な評価をもとにしたスタディが必要である。

愛知県豊田市の古鼠水辺公園は、多層的な川との関わりが見られる水辺の好例と言えよう。この水辺公園は、多自然型川づくりや川の原風景の再生などが評価され2007年度土木学会デザイン賞を受賞しているが、それ以上に、住民主体の水辺公園愛護会による日々の維持管理や、日常的に静かに佇むことのできる居場所として市民に使われるなど、周辺地域への波及がみられる。

そこで本研究では、古鼠地区を対象に、過去の人々の水辺との関わりに着目しながら、水辺の空間特性と履



図-1 古鼠水辺公園
(土木学会 HP より)



図-2 古鼠水辺公園

歴に関する調査分析をケーススタディとして行い、今後の水辺空間整備における示唆を得ることを試みる。

2. 研究の概要

(1) 既往研究

河川空間の物理特性と、空間の履歴に関して、以下に挙げる既往研究をレビューした。

a) 河川境界領域の空間特性と構成要素との相関性¹⁾

岩崎らは、ふるさとの川整備事業12事例、その他12事例を選定し、河川横断面と水辺空間の段階変化からの分析を行い、境界領域の空間特性と構成要素との相関性をみた。結果、段階の形成、境界の連続・分節の仕方によって良好な空間を形成できるとしている。

b) 河川と周辺地区との街路ネットワーク²⁾

平野・國枝は、河川流域9地区の街路ネットワーク

土地利用に関しても、左岸に多く残る山林・荒地と右

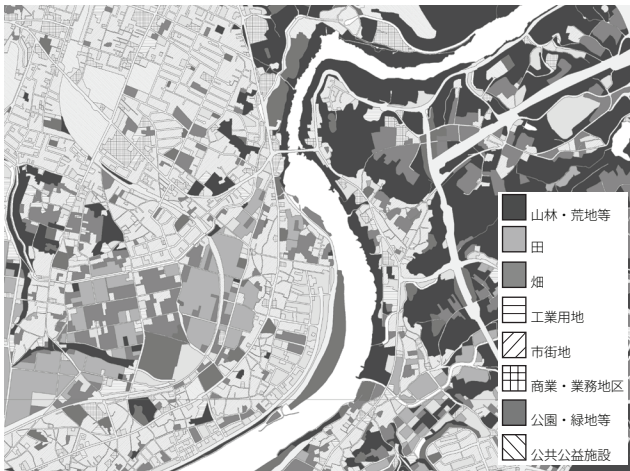


図-6 古鼠地区現況土地利用

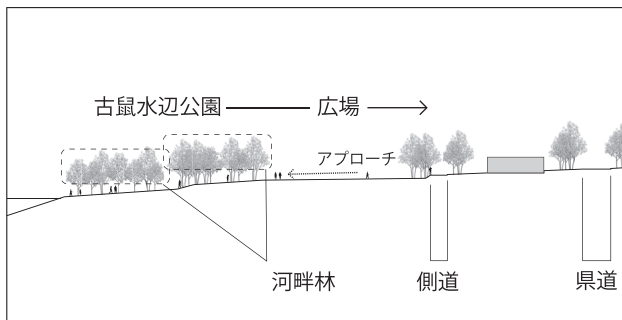


図-8 古鼠水辺公園断面模式図

岸に市街地が多いということとの関係が見て取れる。

c) 古鼠水辺公園の詳細分析

最後に、よりミクロに対象を把握するため、1/2500 地形図を用いて分析を行った。この段階では、河川横断面方向の変化をみることで特徴を抽出できると考える。

物理的に川に近づくことができる場所は、右岸・左岸どちらにも存在するが、特に左岸の古鼠水辺公園に関しては、背後から勾配が緩やかになっており、川に直接近づきやすい特性がある。また、左岸側の横断面方向の変化として、後背丘陵地、寺社仏閣、点在する集落、縦断面方向に伸びる街道、河畔林といった形で、集落から河川に到達するまでの中間領域が形成されていることがわかる。堤防があるわけではなく、中間領域の役目として河畔林があることを指摘しておきたい(図-8)。

(3) 社会・歴史的特性分析

次に、社会・歴史的特性として古鼠水辺公園周辺地区における時間軸からの分析を、市史をはじめとする矢作川流域の産業や人々の生活に関する資料^{8)~12)}を用いて行う。

a) 矢作川の舟運と流域産業の歴史

矢作川流域の河川との関係は、元々は河川水系に沿って発達した地勢が関係しており、古代の交通ルートは川沿いではなく山の尾根が中心だった。そして上流からの夥しい土砂の流入などにより海岸平野となった

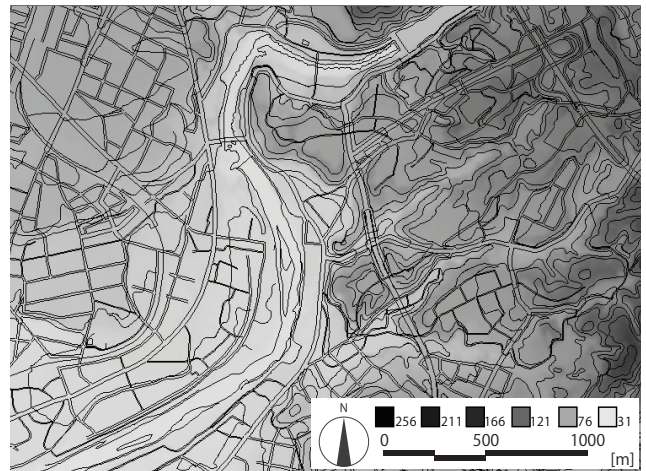


図-7 地形図広域分析

後、稲作文化が広がった。産業については、以下の通りである。

1) 中世

律令制下の東海道は官道であり、物資の流通などを含めて、陸路(東海道)と水路(矢作川)の接点が重要な拠点だった。中世後期には、川からの交通ルートとして岡崎~足助間をつなぐ中馬街道などが確定した。

2) 近世・近代

江戸時代に入ると、年貢米と貨幣との交換のため、大型の廻船が台頭することとなる。矢作川流域もその例外ではなく、大阪や江戸の中間地点としても重要視されていた。つまり、地方の産物と大市場からの物資を繋ぐ役目として舟運の存在が大きかった。

物資流通の流れとしては、上流部から米・材木が越戸や古鼠に運ばれ、越戸~鷺塚、平坂まで舟下げされた後、大阪や江戸に運ばれる。矢作川本流において最もさかのぼれるのが越戸・古鼠までのため、古鼠周辺に貯木場や土場が形成された。材木は筏流しという方法で下流まで運ばれていたが、時期としては冬など洪水のない時期に川下げし、古鼠で筏に組んだ上で平坂まで運んだという。矢作川舟運の特質として、近世・近代に繁栄したのは、三州中馬及び信州中馬街道の陸運と接続していたことにあると言える。

現在では貯木場の跡が残るのみとなり、日常的に使用されることは無くなってしまったが、場所の特質を読み取るためには重要な拠点であると言える。



図-9 古鼠土場絵図¹²⁾



図-10 百々貯木場(大正7年)¹²⁾

b) 古鼠における人々の生活の記憶

矢作川流域における人々の生活の記憶として、舟運

の他に漁業が挙げられる。特に古鼠周辺ではアユ漁が盛んであったが、人々の生活の転換期となった伊勢湾台風と高度経済成長期の周辺を中心に記述していく。

1) 発電所と漁業者との関係（戦前～戦後）

農業用水目的で建設された明治用水頭首工（1901）により、矢作川は水量不足・水質悪化・魚道の不備などの問題が起り、翌年矢作川漁業協同組合の前身である矢作川漁業保護組合が設立された。1920年代には水力発電所と漁業者との対立が深まり、経済的見地と生活権とも言うべき社会的事情が絡み合った問題が顕在化した。河川に棲む魚族の保護・繁殖と河川改変による公共事業はともに公益性を有するものであり、漁業権の認可によるトラブルを避けるためにも国や県は曖昧な態度を取らざるを得なかった。

2) 河川漁業を取り巻く環境の変化（高度経済成長期～）

その後昭和30年代に入って、伊勢湾台風（1959）により矢作川流域を取り巻く社会が大きく変化させられたこと、そして高度経済成長期における河水利用の効率化・河川管理の中央集権化を目指した治水・利水のための河川改変によって川そのものの構造改変が相次いだ。また、工業の進展に伴う排水・汚水による河川汚濁や河川漁業を成り立たせていた第一次産業を主とする生業サイクルが崩壊したため、これまでアユ漁で生計を立てていた人々も川から離れざるを得なくなった。

これまでの漁業を中心とした人々の川との多様な関わり方は、相次ぐダム建設や水質汚濁によって少しずつ消滅してしまった。また、川を特定の目的として利用する合理的方法という観点により、例えば沿川空間の公園化がなされ、その結果河川の意味的分断が起こった。そして、川を捉える指標が”水資源”としての効率化へと推移しつつあることは近年の河川整備の傾向と同様である。

3) 古鼠水辺公園を取り巻く現在の状況

こうした流れの中で、古鼠地区も例外ではなく川と周辺地域との関わりのなかで繰り広げられていた活動が途絶え、その結果、河畔林をはじめとする植生が野生化し、人が入れるほどでは無くなってしまった。

しかしながら、元々あった関わりを取り戻すべく、自然石を用いた水制工の設置と竹林の伐採を行い、矢作川へのアプローチを創出したことで水辺が再生するに至った。古鼠水辺公園の整備によって川が人々の生活の一部に戻り、自由な関わりが再び見られるようになった。

4. まとめ・今後の課題

本稿では、古鼠水辺公園をケーススタディとして空間軸・時間軸からの分析を行い、水辺における場所のポ

テンシャルを読み解くことを試みた。

古鼠水辺公園をとりまく空間特性として、背後地域からのアプローチがしやすく、水辺と沿川空間との中間領域に河畔林の存在があり、物理的に近づきやすいという点が挙げられる。また、古鼠は、以前には産業や人々の暮らしのなかで川との密接な関わりを持っていた時期が存在しており、それが現代において形を変え、水辺公園として様々な主体によって活用されていることがわかった。古鼠のように、水辺を取り巻く人々の暮らしが元々は川と密接に結びついたものであるとき、場所の選定と実際の拠点整備によって、周辺地域への波及効果を生み出す特性を有しているのではないか。

最後に、今後の課題を以下に挙げる。今回対象とした古鼠水辺公園の調査・分析に関してより詳細な視点と、今後それを比較するための事例収集を進めていく必要がある。

参考文献、補注

注1) 例えば、ふるさとの川モデル事業（1987）を前身とするふるさとの川整備事業では、対象とする河川に①『まちの顔として誇れる』、②『自然的、歴史的、社会的環境の中で良好な空間整備』、③『水辺空間と一体となったまちづくり』のような条件を設けており、川と沿川地域との関係性を考慮することが求められている。

1) 岩崎直子、重村力、山崎寿一：都市河川整備における空間特性分析と水辺環境デザイン—都市河川の横断面の空間構成に着目して—、日本建築学会近畿支部平成12年度研究報告集、p417-420、2000

2) 平野勝也、國枝真希：地区の街路ネットワーク特性から見た河川認識の差異、景観・デザイン研究論文集 No.7、p145-154、2007.12

3) 田中尚人、二村春香、秋山孝正：水辺の景観認識の変遷に関する研究—岐阜県長良川を対象として—、景観・デザイン研究論文集 No.3、p51-60、2007.12

4) 国土交通省大臣官房技術調査課・公共事業調査室：公共事業における景観整備に関する事後評価の手引き（案）、国土交通省、2009

5) 篠原修編著：都市の水辺をデザインする、彰国社、2005

6) 河川景観の形成と保全の考え方検討委員会：河川景観デザイン『河川景観の形成と保全の考え方』の解説と実践、財団法人リバーフロント整備センター、2008

7) 関正和：大地の川、草思社、1994

8) 矢作川漁業協同組合：環境漁協宣言、風媒社、2003

9) 愛知県豊田市教育委員会：豊田市史 三、愛知県豊田市、1978

10) 広正義：矢作川流域の文化、名古屋女子生活科学研究所、1966

11) 矢作川流域開発委員会：矢作川流域一万年の歴史と文化を探る、建設省中部地方建設局豊橋工事事務所、1980

12) 岡崎市美術博物館：矢作川—人と川の歴史—、岡崎市美術博物館、1999

13) 国土技術政策総合研究所：景観・デザイン規範事例集（河川・海岸・港湾編）、国土技術政策総合研究所、2008